

# 寅さん歩 その14

## 東京に こんなところ-5



平野 武宏

首都東京は徳川幕府の江戸から明治維新へ、そして関東大震災・太平洋戦争の被災で壊滅から復興、1964年（昭和39年）の東京オリンピックによる街並み・交通網の再整備と時代と共にその姿を変えています。そして2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、更に近代的な姿に生まれ変わろうとしています。

「寅さん歩」で東京を歩き回っている寅次郎は「東京にこんなところもあるのだ!」と思わせる場所に出会い、感動しています。新シリーズとして取り上げ、紹介します。都民暦約4年の「寅次郎基準」で選んでおりますので、ご容赦下さい。最寄り駅は代表例です。

～目黒は「サンマ」だけではありません～

### 【すずめのお宿緑地公園】

目黒区碑文谷 3-11-22

最寄り駅 東急東横線 都立大学駅

目黒通りを入った旧碑文谷村の鎮守の碑文谷八幡宮（写真下左）の近くに竹林がありました。竹林付近一帯は多くの「すずめ達のねぐら」になっていて、「すずめのお宿」（写真下右）と呼ばれたそうです。その後、周辺は開発され住宅街となりましたが、この竹林は所有者の角田セイさんにより大切にされ、国に返したいとの遺志により昭和56年（1981年）公園になりました。



園内には目黒区緑ヶ丘一丁目栗山重治さんが旧居を寄贈、移築された古民家も公開されています。



## 【こぼれ話】 目黒のたけのこ

落語で有名になった「目黒の名物はサンマ」と言われますが、江戸時代から名産としてもてはやされたのは「目黒のたけのこ」です。

安永年間、築地の廻船問屋の山路勝孝が薩摩から孟宗竹を取り寄せ、戸越の別邸に植えたのが始まりと言われ、たけのこ栽培は碑文谷をはじめとした現在の目黒区内を中心に世田谷区まで広まったとのこと。

特に目黒のたけのこは農家の人々が創意工夫をして編み出した目黒方式栽培法により、その根を地下深く埋め、無駄な根を切り取って、たけのこの数を少なくし、そこに敷き藁、落葉、こやし等を入れ、「太く・柔らかく・美味しい」と三拍子そろった「たけのこ」が生えるようにしました。根は横に伸びるように活け、たけのこの先が地上から出るか出ないうちに目黒独特の用具で掘り取ったそうです。たけのこは目黒不動で有名な目黒の名を付け、売り出すと江戸中に広まりました。不動前では春「たけのこ飯」を売出し、宣伝に努めたそうです。



次回は 東京の紅葉・黄葉-4 です。

平野 寅次郎 拝